

幼 兒 教 育

第 二 十 卷 第 十 一 號

大 正 九 年 十 一 月 五 日 發 行

目 次

兒童の保健衛生……………久住謹輔

兒童衛生展覽會を觀る……………星野樂子

育兒に關する迷信的傳説……………內務省

出產に關する特殊の風習……………內務省

兒童の子守唄……………內務省

律動遊戲の補遺……………土川五郎

雜 報

少年音樂家(七)……………岡田美津

日 本 幼 稚 園 協 會

特價
表示
出版
總目
錄進
呈

圖書を能きるだけ廉價に提供する第一歩として、秋葉大特賣を行います。

目下特賣中

□ 能きで御覽に準へたしませんが、夏書ほど實上
 が盛んで御覽に準へたしませんが、品切れにならぬ中にお買上
 げ下さるやうお勤いたしました。

□ 此頁に掲げましたのは、筆頭出版物の一小部分を抄出
 したもので御覧いたします。全體を知りたい小方は一轉覽
 黄天大昭和出版部總編輯部一を御覧下さい。

[illegible]

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

コドモ

幼童
雜誌
良友

童話

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。

世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選べるゝであらうか。

單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に任して置いてよいであらうか。

發行所

東京市小石川區
東林町十五番七地

ドコモ社

電話 六二八
石川 二一九

幼 兒 教 育

第二十卷
第十一號

大正九年十一月十五日發行

兒童の保健衛生

——日本幼稚園協會十月常會の講演大要——

內務省衛生局 久 住 謹 輔

歐米諸國に置きましては文明の進歩に伴ひまして、福利事業の勃興した事や社會政策的機運の促進した事、それと國運の發展を冀ふ念慮が愈々熾烈を加ふるに至つた事等種々の情勢に因りまして、千九

百年前後から特に兒童及母親の保健とか保護に深甚の注意を拂ふようになりまして、或は特別の法制を布いたり或は種々の施設を講じて銳意之が刷新改善に力めて參りました所が、偶々這次の大戦に逢ひ一方では多大の人命の損傷を招きましたと共に、他方では出生率の劇減、一般死亡率の劇増を伴ひまして、由々しき人口問題上の打撃を蒙りましたので少しも早く之を防止し若は之を恢復しやうと致しまして本問題は油然として高潮せられ、戦後は勿論兵馬倥傯

の際にも拘はらず戦争の眞最中から、あらゆる障礙を排して只管之が爲に措置畫策到らざるなき狀態であります。

英國では、昨年遂に衛生省の設置を斷行し衛生行政機關の統一擴大を圖りますると同時に所管事項中、最も重きを母親及兒童の保健及保護に置きまして、往年に比し年々五萬の幼兒の夭死を阻止しやうといふ計劃であります。又英國では母親自身の健康相談は勿論其の愛兒の育兒上の相談相手と巡回衛生員ヘルス・ヴィジタの數が非常に増加致しまして、千九百十四年（大正三年）には全國を通して之に従事する者が六百人でありましたが、千九百十七年（大正六年）には千四百四十五人となりまするし、又兒童の健康診斷と育兒

上の相談に應ずる所謂育兒相談所の數も、千九百十七年の二月には八百四十三ヶ所でありましたが、同年の末には千九百十九ヶ所に殖えました、又同年全英國を擧げて兒童週間を行ひ、兒童の養護に日も惟足らざる狀況であります。

佛國では從來人口の自然増殖率の思はしくない所へ今次の戰役にて聯合國中最も多數の人命の損傷を招徠致しました關係上、逸早く兒童の福祉問題に著眼し既に千九百十四年の八月に陸軍省所管として、中央母子保護局を設置し其目的を掲ぐるこゝ次の如くであります。

「妊婦竝に三歳未満の幼兒を有する母親は社交上、法律上、衛生上、一定の保護を受けて通常生活を営む權利を有す、本局の目的は實に此の權利を擁護するに在り」。

又本年の一月には大統領會を以て衛生救濟備急省設置の件を公布し其の理由書中に次の一節があります。

「本省を設置する所以は實に我國民の出生率の昂上を圖り依て以て佛國民の發展と保護とを期するに在り、國民出生率の増進問題は殊に佛國民が聯合軍

の戰捷に最大負擔を納付せる慘憺たる戰後に當り國家將來の爲め最大緊要事なり」。

獨逸も樺花一朝の夢俄然と醒め、只管意を國運の挽回に用ひ、之が要諦は一に兒童の保健増進に在りとし、子を生み之を親ら哺育する母親には保健金を給與し然も之を私生兒の母にも均霑させて居ります。

歐米列國中兒童の保健及保護問題に最も異彩を放つて居るのは北米合衆國で、千九百十四年の春シカゴ市、次で紐育市で兒童週間を行ひましたが、非常な好評を博し、漸次各地に行はれ千九百十六年には、米國勞働省兒童局が中堅となつて三月四日から同十一日にかけて全國を擧げて大々的に之を行ひました。當時之を舉行した地方は實に二千餘ヶ所に上つて居りますし翌年は更に二倍以上の地方で之を催しました。兒童週間と申しますのは一週間を擧げて兒童の衛生思想を鼓吹するやうな展覽會、講演會、育兒相談、子供行列等を行ひ新聞雜誌には育兒問題を掲載し子供を無料自動車で郊外へ伴れて行つたり、赤坊の在る家では國旗を掲げたり、種々子供の喜び且つ爲になる催事を行ひ延いては育兒相談所

巡回衛生員、小兒病院、兒童衛生局もしくは兒童衛生課の設置とか増設の如き、兒童の保健に資する施設の勃興を促し且之に關する法令の公布を見るに在ります。又千九百十八年には「子供の年」と題する大運動を起し「兒童の保健は國民の威力なり」と題する標語の下に一ヶ年を通じて全國に亙り兒童の保護に努力して居ります。此運動の期する處は左の五項にあります。

一、母親及兒童に對する公共的保護。

一、家庭に於ける兒童の養育の最低標準と之に要する生活費の保障を營むこと。

一、少年勞働法及就學法の勵行。

一、兒童に戸外生活の機會と善良なる遊樂の機會を與ふること。

一、孤兒棄子少年犯罪者其他の異常兒の處置を講ずること。

ウィルソン大統領は、此の運動に多大の望みを囑し「戰線に立つて奮闘して居る軍人の爲に最善を盡すのは吾人の第一の義務である。次に我總人口の三分の一を占むる兒童の健康を増進することが他の如何なる事實よりも更により以上愛國的なる吾人の義

務である」と述べられて居ります。

又昨五月大統領の命に依て勞働大臣（兒童勞働省内の一局）が各州の知名代表者を華盛頓に召集し母親及兒童の養護について協議會を開きましたが（兒童の勞働教育に關する協議事項は前號所載につき略す）その中母親及兒童に關する保護の最低標準が示されましてこれは特に皆様の御參考迄に其の大意を申し上げます。

一 母親保護の最低標準

一、妊産婦保護所 妊産婦にして私費を以て醫師に付き診療助産等の手當を受くること能はざる者の爲必要にして充分なる妊産婦保護所を設くべし、其の掌理する事業左の如し。

一、妊婦に對し成るべく妊娠の初期に於て骨盤の測定、肺臟、心臓、消化器の診斷、尿の検査等周到なる健康診斷を施すこと、初妊婦に在りては受胎後七ヶ月迄に内診を行ふこと、受胎の初期に在りては四週間に一回、六ヶ月以後は少くとも二週間に一回尿の検査を爲すこと、成るべくワッセルマン試験を施すこと、身體的兆候により必要を認むる時

は特に然りとす。

二、受胎後六ヶ月迄は少くとも毎月一回其の後は一週間毎に一回相談所に出頭せしめ、妊婦の保健上の監督指導を爲し兼て初生児取扱上の心得を記せる印刷物を附與すること。

三、巡回看護婦を置き妊婦ある家庭を訪問せしめ親しく妊婦に衛生上の心得及初生児の取扱法を教へ褥婦を訪問指導せしめ、又幼児を有する者にして兒童保護所につき指導を受けるや否やを檢せしむること。

四、醫師若は熟練なる産婆をして家庭内又は病院に於ける出産時の助産を爲さしむること。

五、家庭内若は病院に於ける産婦及褥婦の看護。

六、醫師又は看護婦をして出産後五日間は毎日次の一週間は少なくとも二回褥婦を訪問せしむること。

七、正當の出産に在りては出産後少なくとも十日間は産褥に居らしめ四週間乃至六週間は健康恢復上必要な時期なるを以て家事上の補助を行ふこと。

八、産後六週間を経たる時更に醫師をして健康診

斷を行はしめ異常なきを知る時初めて健康恢復したる婦人と看做すこと。

一、保護所の設置なき、もしくは近く之が設置の見込なき地方に在りては公設看護婦をして醫師の指揮の下に如上の務を執らしむること。

二、齒牙治療所及花柳病治療所の如き治療所を設置し妊娠中必要な治療を施すこと。

三、難産癖の者若は希望者を收容する爲産院を設け若は病院内に産室を設置すること。

四、産婆は法定の學歴經驗を有し且つ免許狀所有者にして其筋の監督を受ける者なること。

五、哺育期間中生母をして家庭内に止まり自ら其の子を哺育せしむる爲相當の扶助金を附與すること。

六、公衆に妊産婦及乳兒の死亡と之が解決につき教示すること。

二 乳兒及學齡前の幼兒保護の

最低標準

一、出生後三日以内に届出を勵行せしむる如き法令を制定し完全なる出生登録簿を調製すること。

二、法令を以て出生時に於ける初生兒の眼の手當其他必要な措置を爲し以て幼者の失明を防止すること。

三、必要にして充分なる兒童保護所を設け私費を以て醫師の診療を受けること能はざる乳兒及幼兒の爲健康相談に應じ少くとも乳兒期中の一ケ年は毎月一回其後學齡に達する迄は隨時母乳の有益なること、育兒の方法及幼兒の榮養に付母親に指導を與へしむること、本保護所に榮養部及齒科治療所を附置すること。

四、兒童保護所は學齡以前の幼兒ある家庭を訪問せしむる爲必要にして充分なる公設看護婦を置き又は之と協力すること、公設看護婦の數は人口二千につき一名とし其の職掌は家庭を訪問して左の事項に付母親を指導せしむるにあり。

一、母乳の價值。

二、幼兒の看護法。

三、入浴、睡眠、被服換氣其他乳兒の一般取扱法（之が指導には示範を以てす）。

四、人工榮養品を與ふる時の準備と方法。

五、乳兒及幼兒の飲食物の種類と其の選擇法。

六、幼兒の疾病豫防。

七、齒科治療所、眼科及耳鼻咽喉科治療所、花柳病其他の疾患及不具者の治療所の設置。

八、小兒病院若は一般病院内に小兒室を設け又家庭に於ける看護設備を講じ以て疾病に罹れる乳兒及幼兒の醫療看護をして遺憾なからしむること。

九、育兒院若は幼兒家庭委託所の許可と監督。

十、乳兒及幼兒の傳染病豫防其他之が衛生及榮養に關する一般的知識の普及。

三 學校兒童保護の最低標準

一、學校の位置、構造、衛生、換氣等を適良ならしめ且つ教室の廣さと兒童數との關係を適度ならしむること。

二、適當なる運動場及遊戲用具の設置及體操竝に遊戲の監督。

三、學校内に於ける醫療室の設備と醫療上の實驗に充つべき室の設置。

四、毎日出勤の責ある學校看護婦を置き兒童の衛生及榮養上の指導を掌らしめ又兒童の家庭を訪問して其の母親に衛生及榮養上の指揮を與へしめ且つ必要

ある時は両親の承諾を得て兒童を診療所に伴ふこと。

五、兒童二千名に付隨時務の學校醫一名、毎日勤の看護婦一名を置くこと。

學校醫を置くこと能はざる時は兒童千名につき毎日勤めの看護婦一名を置くこと而して其職掌は左の如し。

(一) 毎年一回完全なる身體検査を行ふこと但し學年の始期と終期に身長、體重の測定を爲すこと、成るべく毎月一回體重を測ること。

(二) 兒童の累年別身體検査表を調製し之を該兒童に關する他の書類と共に整理すること此の検査表は入學時に携へ來れる該兒童の學齡前に受けたる身體検査表と繼續せしむること。

(三) 教員又は看護婦の申請ある兒童には特別身體検査を行ふこと。

(四) 傳染病豫防に關する指導。

(五) 恢復の見込ある不具、疾患、榮養不良に關する處置手當の指導獎勵。

(六) 學校醫の指揮を遵奉するや否やを看護婦をして督勵せしむること。

六、齒科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科診療所と連絡を執り且つ天然痘豫防のため種痘を施すこと。

七、腺病質、結核性、甚だしき榮養不良性の兒童のために休憩時及補助榮養物を顧慮せる野外學校及精神上並身體上の缺陷に因する特殊教育を要する兒童に對する特殊學校。

八、榮養不良兒を收容する榮養學級及必要ある時は晝食を供給すること。

九、癡鈍及魯鈍兒に對する神經検査。

十、學校兒童に衛生上の知識を與へ保健上の習慣を養はしめ兼ねて弟妹の衛生及世話に關する指導を與ふること。

十一、両親及教師は勿論公衆に保健衛生上の知識を普及し以つて兒童の保健問題に付各方面の協力を得ること。

四 青年保護の最低標準

一、少くとも毎年一回醫師に付身長體重は勿論完成なる身體検査を受くること、其他兒童保護所、學校醫等に付必要なる指導を乞はしむることを獎勵すること。

二、不具及疾患に關する治療所

三、左記事項に付良習慣を養はしむる爲指導監督を爲すこと。

一、充分なる榮養特に身體の發育上有效なる食物を選ぶこと。

二、充分なる睡眠、休息及新鮮なる空氣。

三、適當なる被服。

四、身體の發育に資すべき適當なる運動。

五、性の教育と生殖問題。

四、少くとも滿十六歳迄義務教育を課すること、其の教課は青年の必要に應じ趣味に合ふものにして職業上の指導訓練たるものなること。

五、充分なる清遊の機會を與へ社會上の要求に應せしむること。

六、酒色其の他の不良なる習慣に對しては立法的手段に依り豫防を講ずること。

以上の決議事項は母親及兒童の保護に關する最低標準でありまして、大都市に於ては既に殆んど實施せられて居ります。尙各地とも是以上の良施設を講ずるに汲々たる有様であります。

翻つて我國の人口問題を顧るに、生産率は減少し

妊産婦の死亡數、死産、乳兒の死亡數年々増加し(増加の數字は前號所載につき略す)一方國民の體位は低下し即ち數に於ても質に於ても最愛ふべき狀態に在るのでありますですから兒童の健康を増進することは國民保健問題の中堅であり民族衛生の先驅であります。實に大正五年の調によると我國一歳未満の乳兒死亡數は三十萬七千人に達し且つ其半數十三萬位は生後一ヶ月の壽を完し得ず尙十三萬の半分は七夜迄に死亡して居ります。我國は此の際は兒童の保健衛生問題に就ては大奮發を要する秋と存じます。而して兒童の保健衛生上の向上改善をはかりますために其の方法素より一二に止りますまいが、差當り重要な事項は育兒法及妊産婦の攝生に關する思想の普及と之に應ずる社會的施設に就ては當局に於て別に考へつゝある所がありますが差當り兒童衛生思想の普及が急務と存せられます。

今回お茶の水の教育博物館で催します展覽會のごときも其の一端に供したい爲であります。

何卒此の舉を機運として社會の各方面の方々特に皆様の御協力と御努力に依つて可愛い御子様に関する衛生思想を普及し以つて心身共に潑潑たる次代の

國民を造り依て、邦家の深憂を除去し國家の進轉に

資したいと存じます。(文責在記者)

兒童衛生展覽會を觀る

兒童の保健に關する思想を普及させる目的で此度

内務省主催の衛生展覽會が教育博物館に開かれまし
た。階上階下を通じて全體を六部に分け出品數の多
い内容の充實してゐることは月並な博覽會の比
でなく、且つ興味上からも足を止めるものが澤山あ
りました。順路により參考になるものを書きぬきま
す。先づ第一部は階上の妊娠分娩の部より始り、
専門家の研究の中にも磐瀬博士は畫入りで妊娠中の
心得を懇切に通俗的に説明し、木下博士はそれを更
に歌にして、

一、食物はふだんの儘で支^{ツカヘ}なし毒立て等はなき事と
知る、

二、はき下し食慾無きと腹痛とひけつは醫者の手當
を受けよ、

三、運動はふだん慣れたる程よりも控目にせよ無事

ならん爲、

四、乗物に長くのるのは心せよ散歩するのも程々が

よい、

五、轉ぶなよ梯子^{ハシゴ}階段^{キザハシ}坂道は殊に用心するが肝心、

六、溫泉や海水浴は禁物で腰湯長ぶろ等も慎め、

七、芝居寄席長く見るのは慎めよ物見遊山に遠出な

どすな、

八、呼吸^{イキ}はすみどうきむくみやをりちなど醫者に見

せるは早き程よし、

九、幾度も半産するは病あり診察受けよ醫者の許に
て、

十、身二つになる支度には手落なく産衣産具の用意

揃へよ、

十一、産月に近よる迄に勝れたる技術と手なれの産

婆頼めよ、

東京女高師保姆 星 野 樂 子

十二、落付きて無駄な心配せぬがよし産の時にはそれが大切、

十三、早やくから無理にいきみて疲れるな自然のいきみ待つがよろしい、

十四、いきむなど云はれたならば口あいて深く呼吸をせねばならぬぞ、

十五、苦しくて體動かし悶ゆるな手當の邪魔になる計りなり、

とまとめられてありました。

中央のガラス箱の中には實物及模型の胎兒が十月の順を追うて示されてゐました。

二部の養護の部では美しい人形で子供の負ひ方抱き方の善惡を示し、町家風の内儀が赤坊の首を胸に押しつけて固く抱いて居るのに引換へ、束髪のお嬢様が左手は軽く頭部のうしろを支へ右手は一寸脊中に入れて赤兒を平らに抱いてゐるのを並べ、うしろのガラス箱には老婆がねんねこの中に赤兒のくびを埋め、女中が脊中に頭をおしつけて負うてゐるのと兩方惡きに反し、中央の若い母が前から赤兒の顔が明らかに見得る様嬰兒の體を斜に負ふて居るのをよいとしてあります。左手に一列藁のおはち入れが

並んでゐると見たのは各地の搖籃でありました。

兒童と色盲の所には男兒の百人中四、五人は色盲で女兒は男兒の十分の一より少く、且つ誤る色は赤色と緑色とを灰色又は褐色とする事で、青色と黄色は決して誤らぬと書いてありました。兒童に見せて悪い本としては文字の小さなもの、色彩の強いもの、畫の中に文字ある事の三ヶ條が實物と共に擧げてありました。更に進み行くと林間學校やら夏期休暇の海水浴さては朝の體操による兒童の健康増進の表や寫眞の數多い中にかこまれて朝海幼稚園の出品なる玩具恩物類の滅菌箱が目につきました長さ三四尺の長方形の木製の箱を三段に分ち欄上に滅菌する品物を載せその下にフォルマリン三〇・〇過マンガン酸カリウム三〇・〇水三〇・〇を入れた壺をおき箱の戸を密閉して十時間以上おくのださうで出來得るならば各幼稚園に備へ度いと思ひました。實踐女學校は「現今家庭に於ける保育の理想と實際」と云ふ題目の中で子供に對する危險の種類を畫の表で表し、

山と海の危險、交通の危險、讀み物見物の危險、動物の危險、二階と階段の危險、火傷の危險、おやつ、の危險、玩具の危險、藥繪の具の危險、縁側

の危険、牛乳の危険、添寝の危険、

をあげそれを防止する方法として兒童組合の必要を
とき學校神社寺院内の空地を利用して監督者をお
き、費用は組合員より取り立てる由にて尙理想の保
育所を立てるならば左の如くにし度しと假想保育所
が説明してありました。

敷地三百坪(内芝生百坪、花壇及植込四十坪、雨天
用上屋一棟二十五坪、監視人管理者住宅一棟三十
五坪)小山一ヶ所、小池一、砂場一基、ブランコー
遊動木一、滑臺一、障礙物二、三ヶ所、井戸洗湯一、
門二、組合員三十五戸、兒童六十四名(内三歳乃至
六歳三十六名七乃至十歳二十八名男兒三十四名女
兒三十名)

これも近頃の兒童に對する社會改善の聲の表れと
して面白く思ひました。階上中央に當る所に畏くも
東宮殿下淳宮高松宮の御使用遊ばれた御机がそれ
れ御年齢を経て大小六脚を据ゑ奉り御質素な又御兄
弟一つの御机を受けつぎ給ふ御美德を一般にお示し
遊ばされて有難いと存じ上げました。その前の廣場
にフレーベル館が理想の幼稚園として運動用具の模
型に戯れてゐる豆人形を飾り、進みて三部に入れば

住居と用品の部で、入澤博士夫人の兒童の寢室と居
間を兼ねたものとして寢臺の片側に布團を積み上げ
カーテンを引き晝は半分毛布を敷いて長椅子とする
のやテーブル本箱オルガン腰かけのシーソーその他
の室内運動具を備へた瀟灑な一室が考案されてあり
ました府立工藝學校では如何にも兒童の喜びさうな
鳩の形をした腰掛車、四五尺もありさうな虎でおす
と聲を出す大きな玩具、玩具をのせて遊べる机長椅
子に至る迄子供向きの彫刻や意匠が施され、直きに
壞れてしまつて片手にのせられる様な唯精巧を旨と
した様な此の頃の玩具の缺點を補つたよい物が陳列
してあり、大人でもその前を暫し行き兼ねました。

疾病の部は全く専門的で傳染病の模型その他藥品
類が所狭き迄並べられ、殊にトラホームが田舎の老
婆の上京によりお土産として全家にうつされた慘事
や、或は電車内で、或は晝本より或は學校の友達よ
り又公園のベンチ等よりうつる有様が恐ろしく晝に
かゝれました。宮本仲氏の危険調として委しいもの
が又表になつてをりました。

此の部に入ると、體溫器検査で普通賣買される體溫
器は誤が非常に多く内國製第一種は百本に對して正

しい物が僅かに十七本、同じ二種は四十二本、三種は九本、四種は五十三本、五種は二十八本、六種は二十五本、外國製のは第一種六十本、第二種六十三本の割合とは醫者の次に信用して喜憂の標準となるもの丈に驚かれました。榮養の部では警視廳の「誕生より入學迄の衛生」の中に、繪の具は紅朱に鉛丹、黄に劇物籐黄又はクローム黄、緑にもクローム黄等の有毒な染料がある由籐黄(ガンボーチ)の如きは僅かで劇しい下痢を起す事とかゝれ色鉛筆は蠟を基礎にする故とける心配なけれど、なめぬがよく、紫鉛筆はかけらが目に入つても失明する由。近頃玩具には有毒性著色料取締規則發布以來繪具は改良され昔用ひられた雌黄、花緑青等の砒素を含むものはなくなり、現今の彩色は殆んど無害なテール色素か又はたとへ有毒な鉛丹、クローム等を用ひてあつてもブリキや印刷エナメル塗又はゴム、ワニス等に融和して剝離せぬから無害なる由が美事な實物にそへてそれぞれ認められてありました又兒童にあたへる飲食物の中で注意すべきものとして、サツカリン入の甘酒、はんぺん、防腐劑入のかまぼこ、硫酸入の酢、銅分の多い青豆、ゴムはうづき、しんこ細工、飴細工があ

げてありました。女子大學は各歳の兒童の三食の獻立を模型で作り、唐澤博士は人乳と人工榮養の兒童の寫真で、前者の健康に引かへ後者のやせて骸骨の様な有様を知らせ、母乳をすゝめられました。この部の出口に同く女子大學の表で不適當な食物の與へ方として「寝ながら食べる、泣く毎にたべさせる、食事にテーブル以外であたへる、飯事の不潔なお椀やお皿であたへる、人の口より食物をうつす、犬猫のそばで食べる、小兒の食物調理は食品に應じること、大道でうるものを食べさせる、汚れた手で取扱ふ」をあげたのはお互の注意が肝心です。階段を下りて右方は被服の部で殆んど和洋折衷の改良服で充ちてゐるのは生活改善の大きな氣運を最よく表してをります。子供連れを喜ばせる動物や木材の陳列をも見て出口の處でもう一度ふりかへると正面の階段に兒童の要求として「悪い牛乳を取り締られ、出産届を怠るな、新聞に兒童欄を設けよ、乳兒哺育所を設けよ健康診断を行へ、巡回看護婦を設けよ、大庭園を解放せよ、遊園を増設せよ、專屬學校醫をおけ、育児相談所を設けよ、適當なる食物を與へよ、子守學校の普及を計れ、適當な衣服を與へよ、母の榮養を計れ、

良乳供給所を設置せよ、子守任せをやめよ、母乳に限る」の文字を羅列してありましたのはこの展覽會

を一貫する思想として長く頭に残りました。

育兒に關する迷信的傳説

北海道

一、人見嫌する幼兒に對しては、濡雜巾にして面部を拭けば、他人に狎るゝと云ひ、又夜間泣く兒は、枕元に出刃又は小刀を置けば、泣き止むと云ふ。尙又出産時の湯を瓶に入れて、二本枕元に備置くときは母乳不足せずと稱し居れり。(石狩)

一、夫婦共厄年に相當する年に、出産せし兒は、生育鈍しと稱し、此の厄禍を避くる方法として道路の四ツ辻に産兒を棄つる眞似をし、之を拾ひ上げたる他人より其の子を貰ひ受くる等の假裝をなす例あり。(渡島)

一、脱落せし臍の緒は布片を以て包み(守袋の形)母が首に提げ永久保存す。此風習は兒童教育健全を守護する爲なりと云ふ。而して死亡したる時は其の

内務省

死體と共に埋葬すと云ふ。(釧路)

京都府

一、幼兒の屢々夭折する家庭に在りては、嬰兒の無病健全を祈るため出産後七日乃至十日位經過したるとき箕(農具)に蒲團を敷き、其上に嬰兒を置き之を他家の軒下に捨てたる如く假裝し貰兒として育つるときは無病健全なりと云ひ豫め拾ひ主と打合せ置き吉日を選び拾ひ主より晴衣を著せ捨てたる主婦を招き祝宴を開き嬰兒の前途を祝福し貰ひ受け歸るを例とせり。(市郡を通じて行ふ)

大阪府

一、大阪中東區高津自性院、東平野町柳寺に幼兒の蟲封じと稱し約一週間前後祈禱を爲し守札を與へ是によりて幼兒が蛔蟲に基因する種々の病氣の爲發

育を阻碍せらるゝことなしと傳ふ。

神奈川縣

一、産兒男なるときは筆墨、女なるときは針を添へ産穢物を家屋の土臺下等家族の足下に位する場所を選び埋没す、(之れは産兒の發展を希望し尙ほ兩親の意に服せしむるを意味す)。

一、女子の不健康なる家には女兒に男兒(例へば「勇」の如く命名するものあり又「あぐり」と命名するものあり)。

埼玉縣

一、鬼子母神、吞龍聖人、地藏尊、觀世音等を信仰し生兒の健全に發育する様祈願するもの尠からず。就中吞龍聖人を崇拜するものは兒童を吞龍坊主と稱して七歳まで男女共剃髮して御弟子となし以て佛陀の加護を祈るものなり。

群馬縣

一、改名即ち男子に女子の如き名を付け又は女子に男子の如き名を付けて呼ぶの例あり例へば、佐藤金太郎をはなと呼ぶが如し。何れも健全に育つと云ふ迷信なり。

一、舊十二月一日「川ビタリ」餅と稱して餅を搗き

川に流すことあり。斯くするときには子供が川に流れて死することなしとの迷信なり。

一、生れたる兒に對し第一著に「ホーヅキ」の根若くは實の皮を煎じて飲ましむ之は蟲氣を防ぐとの傳説なり。

千葉縣

一、一家三夫婦ある家に於て作りたる里芋を祕密に食せしむれば妊娠す。又「ホウ」の木を植ふれば同じく妊娠すと傳ふ。(各地方に行はる)

栃木縣

一、出生後男子は二十一日、女子は三十一日目に宮詣りと稱して神詣り及び子供の間入りと稱して錢と赤飯とを近隣の子供に分與する風習あり。猶は百日目に食初めと稱し赤飯及齒の固くなる様にと小石を挟みて食せしむる眞似を爲すものなり。

愛知縣

一、出産後七日夜に當りて嬰兒の顔に白粉を塗り額に紅を以て壽の一字を書き是れ即ち長壽百歳を保つと云ひ或は亦白粉を塗るは女子にして成長の上結婚式るとき此の塗りたる白粉が顔に浮き出でゝ美顔となる謂なりと稱して専ら實行し居れり。

一、母親の乳出でざるときは、鯉の目玉を抜き之を呑み旨の鯉となし池に放つときは忽ち乳の出る様になるを謂ふ。

一、育兒身體の虛弱なるときは、弘法大師の御弟子とすると誓ひ三年五年長きは十五年位迄剃髪せしめ男子女子の別なく、頭髮を蓄へざるときは將來健康なりと謂ふ。

一、本縣尾張東北部地方に於ては丹羽郡池野村に鎮座せる尾張富士淺間神社へ小兒を十五歳又は二十歳と年齢を限定し預けると稱し祈願し其の年限中は毎年祭禮に石を携帶參詣し其の場合神鎌を借り來り小兒の守札となさば必ず成長と稱し此の傳説頗る高し。

一、名古屋市南區熱田に鎮座せる高倉神社は毎年舊曆六月一日井戸覗きと稱し育兒を連れ該井戸を覗かしめ其の井水を吞ましむるに於ては子供は蟲疳が出ざると稱し古來より傳へられ當日、市内竝に近在より參詣する者數萬人なり。

山形縣

一、生後六ヶ月前に齒の生へたるときは之れを親食ひ齒と稱し之を忌み嫌ひ近所の者に願ひ申合せ嬰

兒をして「タラヒ」に入れて川に流し近所のものは川下に居りて之を拾ひ上げたるを更に、實母に於て貰ひ受けたる體になすものなり。

秋田縣

一、産後三日内に名を付けざるに雷鳴あれば獸の名の字を付するの例あり。寅吉、寅松、熊五郎、丑松女はトラ、クマ、ウシ、イノ等の如し又七日以内に雷鳴あれば名に金の字を付するの例あり。金藏、銀治、鐵藏の如き女は、テツ、キン、ギン、カ子の如きを付するものなり。

福井縣

一、産兒の初湯を沸かす際其の燃料中に漆器又は漆の容器を加ふるときは産兒は生涯漆に感せず又汗疹を豫防すと云ふ。

石川縣

一、丑の年生れの子は家の跡を絶やすと云ふ故に多くは養子に遣すか然らざれば「外」字に因み命名するを習慣とせり(外吉)(男)外枝(女)の如し。

島根縣

一、父母又は父母の一人が四十一歳の時に生れたる子は其の親が四十二歳の時其の子は成長せず或は

成長せず或は成長するも親を喰ふと唱へ豫め近隣の者と打合せ置き生兒を最寄の四つ街道に遺棄したる眞似をなし近隣の者は其の育兒を拾ひ上げたる體を爲し更に生家の者に遣はし生家は之を貰ひ子として養育す。

愛媛縣

一、雙子なる時は衣類其の他を男女に不拘同一のものを用ゆ然らざれば一方死亡すと言ふ。

宮崎縣

一、南那珂郡鵜戸村(官幣神社大社神宮鎮座地)にては乳兒に鵜戸山御乳飴を食はしむれば母乳なくとも安穩に成育すと云ひ傳ふ其由來は豐玉姬鷗鷺不合

出產に關する特殊の風習

北海道

一、分娩に際し夫が其腰部を抱き黙して安産を祈願し又は神佛に燈明を點し家族一同拜號して安産を祈願し或は清水を小皿其他の容器に盛り之を捧げて

尊を産ませられ其のまゝ龍宮へ立去り給ひしに依り玉衣姫は未飴にて尊を育て給ひしとの古傳による。

沖繩縣

一、外出の際乳兒を携へ行くときは、眉間に鍋墨を附け魔除けと爲すの迷信あり。

一、本縣に於ては赤兒は出生當日又は翌日命名式を行ふ。其の命名の任に當る者は子孫繁榮し居る老婆を選び婆は赤兒を抱きたる儘桑の枝を以て作りたる矢を番へて的に放て命名を爲しそれより赤兒を座敷に臥せしめ赤兒の胸部腹部に蟹を歩ませ又は「バッタ」を飛ばし赤兒の無事健康なる發育を祈る風習あり。

内務省

安産を祈願して後之を産婦に吞ましむる等の風習あり。(釧路)

一、難産の場合一人は産婦を背負ひ産婦には臼を擔せ靜に家の内を走行せしむ。而して産婦の後面よ

り其臼を杵を以て打つ眞似をするときは分娩速なりと云ふ。

一、出産に際し同族の婦女多數集合し産婦の身邊に於て手足を撫で「アヤポー」(痛いこの意)と掛聲をなし分娩せしむ。

之は産家の出入口に接近したる場所を選びて開放し産婦を其の方向に向はしめて行ふものなり、(膽振)京都府

一、分娩後胎盤を牀下若くは通路に埋却するものあり前者は獸類の發掘せざるため後者は嬰兒を健全ならしむる爲めなりと云ふ。(郡部にありては胞衣取扱業者なきため一般に行ふ風習なり)。

大阪府

一、大和帶解地藏尊に安産を祈念し腹帶を乞ひ受けて使用するものあり。

腹帶は地藏尊菩薩と記したる白木綿にして別に長さ二尺程幅一二寸位の半紙製の帶の恰好せる紙片附屬せり之の紙片には龜の子形之地藏尊の捺印ありて若し之の印の色が朱なるときは女兒を黒なるときは男兒を分娩すると云ふ。

神奈川縣

一、出産のとき産婦の髪を麻にて束み麻産祝と云ひ又富士登山者の點じたる燃へ残りの蠟燭を産婦の枕元にて點火すれば安産す。

一、妊娠便所を清潔にせば好き子を産む。

一、恵方に向へば安産す。

一、夫の不在のとき初産すれば爾後は夫の不在のときのみ出産す。

新潟縣

一、産婆の開業なき山間部に於ては親族其他の老婆助産の勞を執らしめ終生「トリアゲ」親と稱し年末年始、中元、冠婚、葬祭等に際しては物品の贈答を爲す慣習の存する所あり。

埼玉縣

一、妊婦鯉と稱し三百匁位の鯉を妊婦一人にて食するときは安産す。

千葉縣

一、富士登山者が俗に胎内潜りと稱する處を潛る際點火したる蠟燭の餘燼拜戴し來り出産の際之を産褥に點じて念ずるときは安産なりと稱し之を行ふ所あり。(縣下君津郡の一部)

茨城縣

一、實況を撮影したるもの無之も管内一部の村落に於ては藁束二十一束を一把となし出産する際此藁束に寄り掛り出産後一日一束づゝ之を取去り二十一日を経過して初めて平常の如く枕を著けて仰臥することゝなし居り又辻燈と稱し葬儀の際葬列の通過する十字路或は三叉路等に竹の尖端に點じたる蠟燭を取り置き難産の際之を産所に置く時は安産を爲すと稱し又觀世音の守護札を産所の柱に貼付け安産を祈願する等の風習あり。

愛知縣

一、出産の際に天一天上と稱し産婦は軒下或は炭部屋等に於て出産し産後七八日を経て住宅に入るものあり炭部屋のなきものにありては屋内に蓆を四方より吊し其の下にて出産なし不淨除と爲すものあり。

一、本縣尾張東北部地方に於ては丹羽郡布袋町大字力長若宮八幡宮境内の砂を採取し來り安産の守となし出産する時に牀の下に撒布し、蒲團の中にも之を入れ又出産當日頭上に戴くを習慣となす。

分娩すれば御禮として前記八幡宮へ大なる石を返納すと謂ふ。

岐阜縣

一、天井より繩又は帶の類を下げ産婦は之を取り身體の浮沈を助け且つ之を引きて力を添ふる等の方法を用ふ俗に之を力繩と稱す。

山形縣

一、腹帶に就て

妊娠中腹帶を強くせざる時は胎兒過大となり難産するとして強く締む。

又産後腹帶を強くせざる時は乳の分泌悪しくなるとして強く締める風習あり。

妊婦安産を祈る爲め子安地藏尊に參詣し地藏尊の鐘の緒を一本借り受け腹帶として締め安産を祈る尙産後禮參りとして鐘の緒二本を納むるものなり。

福井縣

管内敦賀郡松原村の一部にして海に面したる八ヶ字(神宮皇后を祭れる常室神社の氏子なり)に於ては古來氏神に不敬なりとて各字の一隅に九尺二間の藁屋を建設し置き産婦分娩期に至れば直ちに該納屋内に至り分娩をなし分娩後三十日間は納屋内に於て寢食し外出せば引續き二十日間は納屋内に於て食事し就寢にのみ歸宅し分娩後五十日を経て歸宅したると

き忌明と稱し寒中と雖も海水に浴し身體を清めたる後ならでは全く歸宅せざるの慣習あり月經時に於ても月經期間亦同じ。

石川縣

一、妊娠したるときは臨月又は其の一ヶ月位以前に安産を祈る爲め生家より「コロコロ」團子（洗ひ白米粉を以て製したるもの）を婚家に贈るを例とす而

して婚家にては該團子を親戚知己に分與す。
一、初産の時は、早きは二ヶ月前遅くも臨月の初めに生家に到り出産の準備をなし出産す。然る後早きは、三週間長きは數ヶ月間保養の上婚家に歸るものとす。而して初生子に限り、産著（紋付）等一切の衣類は生家に於て新調する慣習とす。

兒童の子守唄

一、北海道

（チンチンヨー）
いふわく

（此青空）
かんとう

（上カラ）
かわ

（チンチコヨ）
いふわ

（下ツテキタ）
づらんけ

（イッコ）
しんだ

（チンチコヨ）
いふわ

（イッコ）
しんだ

（淵ニ）
ばーだ

（チンチコヨ）
いふわ

（神様）
かもい

（老婆様が見テ居ル）
ふーつ

（チンチコヨ）
いふわ

一、京都府

ねんくした兒に赤いべッ著せて

連れて參いろや外宮内宮。

内務省

(左記ハ管下郡教育會ニ於テ調査セル歌曲)

5	—	5	5	7	—	1.	2	1	—	1	—	1	2	1	2	1	6	6	1
ね	ん	ね	も	り	は								H	の	暮	が	だ	い	じ
1	—	1	1	1	2	1	6.	1	2	1	6	5.	5	1	6	—	1	—	2
朝	—	の	ね	お	き	は	な	は	だ	い	じ								1

1	3	5	3	2	1	3	2	3	2	1	1	1	2	3	2	2	1	2
な	ん	ば	な	い	て	も	こ	の	こ	は	だ	い	—	じ	え	—	ん	と
1	2	4	3	3	2	3	2	3	2	1	—	1						
ね	ん	と	の	お	お	の	た	ね	—									

一、大阪府

一、(イ) ねんねころいち天満の市よ

(ロ) 舟に積んだら何處まで行きやる

(ハ) 橋の下にはおかめ(鵜)がゐやる

(ニ) 竹が欲しけりや竹屋へ行きやれ

一、ねんねおねんねおねんねよ

坊やのお守は何處へいた

里のお土産何貰ふた

大根そろへて舟に積む

木津や難波の橋の下

おかめとりたや竹ほしや

竹は何でもございます。

坊やはよい兒だねんねしな

あの山越へてお里へいた

でんぐ太鼓に笙の笛。

起り上り小法師に犬張子。

一、(俗謡遊戲ニ關スルモノ)

正月來たら何嬉し

お月様見た様た餅^{もち}たべて

黒豆見たいな目むいて

割木見た様魚^{いさな}たべて

雪見たいな飯^いたべて

火燧^{ひしほ}にあたつてねんねこしよ。

一、神奈川縣

ねれねれよーおころりよー

坊やがねた間にべいたつて

御宮の鳩には豆遣^まつて

坊やはよい子だねんねんしな。

坊やはよい子だねんねんしな

御眼が醒めたら宮參り

御池の金魚にや麩を遣つて

一、新潟縣

一、お千代の嬢やん何處へ行つた

佐渡の土産に何貰つた

三に笹色の帶貰つた。(佐渡)

船に乗つて佐渡へ行つた

一に張箱一に硯

一、乙女大きなと江戸へやるぞ

田舎は木綿の襦袢育ち。(長岡、北魚沼)

江戸は縮緬絹育ち

一、埼玉縣

ねんねんよーねんねんよ

坊やのねんねんのその暇に

三つの祝に三ツ身著せ

七つの本身に斷つからは

一つ二つはねて育つ

絲取り機織染上げて

五つの祝に四ツ身著せ

盡せよ世の爲め人の爲め。

一、茨城縣

一、坊やは可愛やお山程

野原通れば千本松

松葉の數よりまだ可愛い。

一、風にくるく風車

乳屋ががたく箱車

婆やの押し出す乳母車

一、群馬縣

ねんねしておきると(御乳)やる

おこめのごはんにとそへて

ねんねんねこのけつに

ひきづり出してもく

ねんねしろかんかしろ

こもりはらくなよでつらいもの

ひとのきばにたいつめば

一、栃木縣

ころく小山の小兒は

母ちゃんお腹にゐた時に

それに耳がお長い。

一、愛知縣

一、守りと云ふもの樂そで辛い

お山で木の數萱の數

千本松原小松原

水にくるく水車

一番綺麗な花車

人を乗せたる人力車

おちくのおではなおいやなら

やなぎのおはしでさらさらと

かにがはいこんだ

またはいこんだよー

こもりしろ

あめかせふいてもやどはなし

たてよあゆめよとせがまれる。

なせにお耳が長いの

椎の實櫃の實たべたとて

親に責められ子に責られて

人に樂ぞと思はれる。

(御老母)

一、おばさんどこへいきやる、

おつもてん／＼／＼あば／＼／＼。

一、岐阜縣

お山でお山で啼く鹿は

寒さで泣かぬ母呼ばぬ

ねんこんこねやこや。

一、山形縣

ねんねしな鐘が鳴る

行けば離宮の乙姫が

一、秋田縣

こつこつ小山の白犬子

こつこつ子守の帶買へば

やえこゝやえこゝ。

一、福井縣

ねんねこや／＼

ねんねが寝た間に

赤いお碗に

白い小皿に

隣りの坊やも

來たらば一所に

三升樽さげてお嫁の在所へ孫抱きに

寒さで泣くか母呼ぶか

明日な野山で狩りと聞く

夢の浮橋とん／＼／＼

坊やの來るのみ待つてゐる。

一匹吠えれば皆吠える

地能く幅よく尺長く

おべろこやさいろこや

まゝたいて(飯炊いて)

まゝよそて

どゝそえて(肴添へて)

呼んで來て

たべませう

一、石川縣

ねんねんや

おべろんや。

一、とんとんとろりとんとんとろりん

お姫様のお使いか

狸もおいたをやめにして

一、寝ねあそばんせ御寶らや

赤飯炊へてとと焼いて

一、島根縣

一、寝んくころく濱の石

通ふ千鳥の濱に行く

玉より綺麗な白の石

泣かすに行きましょ夢の島

一、愛媛縣

ねんねんころく濱の石ころく

もまれて淡路島通ふ千鳥の濱へ行く

夢の島には五色濱

星よりきれいな青い石

泣かすに行きましょ夢の島。

一、宮崎縣

ねんねしよくねんねこしたら

たっんこにも乗せて観音どんの阪を

波に揉まれて淡路島
夢の島には五色濱

星より綺麗な青の石

泣けば千鳥がとんでゆく。

ころんで何處へ行く波に

わたしも行きたい夢の島

濱より綺麗な白い石

鳴けば千鳥が飛んでゆく

餅も團子もついて食はしゆ

のんばりくんたり引き廻はす。

一、鹿兒島縣

老父さん老母さん長生しやい

米は安くならう家計も豊なろう

辨天芝居も亦ござろう。

一、沖繩縣

一、『姉がく守い立てらば

支那日本ん遣らさやー

下駄小ん草履小ん履さやー
瓦葺家の嫁なさやー』

(譯) 姉さんが守り育てたなら下駄も草履も履かすよ支那や日本にも遊學させん瓦屋(良家の意味)のお嫁に遣らうねんねしなし泣くなよ。

一、『お月様よお日様よ

我ふどうわち
來年の六月ねー

うたびみせうり

馬小牛小買ふて差上やびら』

(譯) お月様よお日様よ私を育て下さい來年の六月には馬も牛も買つて差上げますよ。

一、『思童賺ち今ど思知ゆる
昔我れ守たる人の情』

(譯) 子供を守り育て初めて知りました昔我を守り育て呉れました其の人の情を

一、『天の群星や數めは數もりしが
親のゆし事や數めやならん』

(譯) 天の星は數へたら數へられぬ事ないが兩親の教訓は數へられぬ程多い。

律動遊戲の補遺

土 川 五 郎

律動遊戲が幸に小學校や幼稚園の皆様の御情によつて子供に與へらるゝこと殆ど全國に亙る様になりました、各地で講習を致しました經驗から考へて見ますと、あの二冊の本にある動作の説明はあまりに簡單であつて誤り易い點があり、さなくとも私の作りました意味が徹底し得ない憾がありますから、茲に保姆の方が幼兒の前になさる用意の爲め又小學校上級に對し藝術の深みを味はしむる爲めに茲に繼續して掲ぐることに致しました。

一、かいぐり

(イ) 兩拳の握り方 四指を握り其上に拇指を斜めに重ねる

(ロ) 始めは堅く握らしめて柔らかに回はさしむ

(ハ) 胸前へ持ち來れる時手頸を稍々手前に屈して

回はさしむ

(ニ) 肱を後ろに引く時幼兒はやゝもすると兩手を伸ばし下ぐることがある、これでは胸筋を引く

作用を沒却して意味を失ふことになるから、肱を屈したまゝ後ろに引くことに注意せねばならぬ

(ホ) 兩拳を體前にて打つこと三回此の時頭を左に傾け少しく前にして打つ

(ヘ) 兩拳の回轉 一小節に二回の間を取ることを、

此の間の取り方は我國民の拍子の取り方で、西洋の間の取り方と異なる所です、快感の度も自ら異つて居ります

二、おじき

(イ) 手の拍ち方 自然の位置に打つ、殊更に胸に近く持ち來りて打つ如きは不自然である、即ち兩手を兩側に下げそれより最も近き道を取りて體前に打ち合ふ、指先きは斜下に向ふ、これが自然に近いと思ふ

(ロ) 拍手二回の後兩手を兩側に開く時上體を斜左又は斜右になげる、兩側に開かずして膝の所に

兩手を置いたり、腰を屈したりするは誤りである

(ハ) 右回轉の時はずまさきにて跳躍の如く子供らしき回り方を取るべし、片足の踵でくるりと回る様なことはせぬ様に

三、はたおり

(イ) 第一に腕を充分前に伸ばし拇指と四指と相對し堅く物を挟みたる如くして手頸を屈して指を下にさぐ、引く時強くして出す時は反動にて充分に伸ばす

(ロ) 二回此の如くして後三回は極めて少さく

(ハ) 兩手を體前にて交叉する時手頸を少しく屈し其運動は肱を時計のフンドーのゆるる如き心持ちにてなす

(ニ) 兩手を胸前に持ち來り物をつまみたる如くして左右に開く時、ごむを引き伸ばす如く、ジリと力強く左右に開きたる時に全く手頸を外後方に反し再び胸前に反す時次第に手頸を内方を取る

開きたる時肩胛骨の合する迄

(ホ) 右回轉の前に曲第二段第二節の終りの高さ一

四、月

つの音(ソノ音)の時右腕を少しくあげて其足より右に回り始む

(イ) 足の練習 遊戲を教ふるには教授の方法順序がある、これが正しく行はるれば氣持ちよく容易く遊戲中の人となれるのです、先づ左足を一步左へ膝をかがめ右足を左足につくる時に踵をあげて伸びて後下ろす次に右へ同じ運動をなす、これが出來得てから左一步の時顔を左上に向け左肩を少しくあげ踵を下ろす時常位に復す右一步の時同じくす、これがすなほに出來てから左手をあげ又は右手をあげる、これにて第二段、三段を完了するのである

(ロ) 第三、四段 これも足の練習が先きである左足を摺りて一步前に此の時膝を屈し右足を前につくる時伸びて後踵をつく、右足と交互に前進の練習をなす、次に右足より後退する時同じ要領である

手の練習 兩手を左右に開く(自然の形に)時可成後方より頭上へ運ぶこと大切なり而して止まる事なしに前より下へおろす、兩掌を向き合せ

(弧形に)五寸位の距離に對立せしめ、其距離を保ちつゝ體前下方へおろし兩手の伸びたる時更に左右に開く、此の時に手の上方へ行きたる場合顔を其方へ向く

手と足の別々の練習が出来た後に合せて行ふ
(ハ)影を寫す時あまりに頭を前に下げず寧ろ上體を左に傾くる時頭もやゝ左に自然のまゝたるを要す

(ニ)最後の「ロ」の段 兩隣りのものと手を持ちたる如き姿勢を個別に取らしめ膝の屈伸と共に手を上下する事の練習を先きになす、手の上下の場合には下ろす時力強く上ぐる時極めて軽くせしむるを要す

次に足の練習即ち左又は右横足の練習をなす、此の時左又は右へ一步ふみ出す前に第一に踵を浮かしめること、第二につまきを軽く使ふこと、第三に膝の屈伸を行ふこと第四に上體を稍々右方(左行の場合)又は左方(右行の場合)に傾く此の練習の出来たる後手をつなぎて行ふ

(ホ)曲第四段の前進する時手と上體は可成深く下へ順序にあげて最後に頭と同じ高さ(決して手

を上へ充分に伸ばすことなく)にあげ顔もやゝ上方を向く

(ヘ)右回轉をなす場合左足を一步右足の右へ運ぶ時膝をかわむ(あまり上體を前に屈する事なく)次の一步にて伸ぶ

五、 風

(イ)曲第一、二段 踵のみにて足拍子を取ることを教へ、次に「たぐる」ことに移る、たぐる場合に上體は正しく前方に向ひ決して右又は左に向かしめぬ様に注意せねばならぬ、即ち右たぐり場合には上體を少しく右に傾け顔は右上に向へ右手は充分に斜右上方に伸ばし左手は上體の正面に向きて行ひ得る程度に於て右斜上方に伸ばし雙手にて交互に大きくたぐる、左たぐりの場合亦同じ

(ロ)曲第三、四段 風絲を強く引く場合左又は右へ雙手を充分に揚ぐること及び上體は正面に向へおくこと、左又右下へひく時左又は右側にてしつかりと止めて餘勢を残すことに注意すべく右方(左方)に足を運ぶ時右足を一步次に左足を右足の右へ次右足を左足の右へ次に其まゝ左足

頭は跳ぶ足の方へ傾く

○射鎗馬を見て

尖を左方へ向く、此の時の歩法は左又は右方へ側進するので前進するのではない、尙初めて二回叩く時はつま先にてなし、それより軽くたぐりつゝ右側又は左側進を(前に述べたる如く)なす

(ハ)曲第五、六段 三步目に兩手を開く時兩足の踵を充分に上げ頭は出したる足の方向下にさぐ、而して兩手を開く時じり／＼と力強く柔かに側方にあぐ

(ニ)第二回目の曲第一、二段 右向行進兩手を側方に開きたる場合充分に兩手を後ろに胸を出すことに注意を要す

第三、に移る時急に左横足に變ずる所に氣持よき所あり、急速の變化を心持ちとすべく、膝の屈伸に注意すべし

終りの兩手を左右に開き膝の屈伸を行ふとき膝の屈したる時手を下に而して手をそらせる様に力を入れ膝の伸びたる時に軽く手をゆるめる、四段も同じ要領である

(ホ)だるま風にて跳躍する場合兩手は下より軽く組み胸部に影響の少なからしめんことを要す、

十月二十八日明治神宮外苑で二日に行はれる對鎗馬の稽古の拜見を許されて出かけました日本歴史で教へる時もヤブサメと云ふ讀み方の難じさに囚へられて頭の悪い生徒は「人の名」ですと書くものもないではありませぬ故實を目のあたり見る嬉しさに今や遅しと待つてゐると何坪か繞らされた橢圓形の馬場の柵の右手の射梁(アツダ)太鼓をうつ所)から紅の裝束つけた人が合圖の太鼓を鳴らすと左手の端から八騎の射手が各々前に三名の耶黨に角の木の的を持たせ裝束つけた的奉行を引連れ馬のくつわを下耶に取らせて狩衣姿で指貫の袴をはき馬上豊かに弓矢を携へて乗り出して來ました一順すると一度たまりに控えて先頭の一人は衣冠をつけた神主めいた人と馬場の中央で挨拶をし全體馬場を退きますその中愈々なる一聲の太鼓で出るよと思ふ間もなくはやる馬と共に勢ひ込んだ「イヨウアラ／＼」のかけ聲勇しく黒白の幔幕張つた的場の前にたてられた白木の的をはつしと射る拍子にバツと真中から二つに割れてとびますそのまゝ馬はかけつて乗手は腰より二の矢をとつて番へ第二の的場で又も射第三の的場で射て馬場の後へ退いて行きますひつそり靜つた見物人の前で暗の離れ業その昔屋島の戦に花を欺く平家の官女の扇を一矢で射おとした那須の興市の悌は見る由もありませんが夕陽に輝く赤青の錦の衣風をきる矢の音馬の勢は暗れがましく又壯快の極みてした、恐らく頼朝の時分もさうでせうが近代人の射手は見物人の前でかなりなくれたとる人もありましたこれは又一つに馬にも弓にも昔程親しみの少い生活のせいせう

(らく子)

少年音楽家（七）

東京女高師教授 岡田美津

七、居ておくれ

土曜の晩で民雄がこの農家へ来てから三日目の終りであつた。二階の暑くるしい小さな室で、彼は窓の許にひざまづいて、山から涼しい風でも来るかと待つて居た。階下の玄關のところでは、新右衛門夫婦が此二三日の出来事を話し合つて民雄をどうしたものだろうと相談をしてゐた。

「あの子をどうしやうね」と長い沈黙を破つてどう御かみさんが言ひ出した「どうしませう。欲しいつていふ人はいんですか」

「そうさ誰も欲しいいていふものはない」と新右衛門は容赦なく言つてのけた

その言語をきいて、黄ばんだ白地の寝衣姿の民雄は立ち停つた。彼はバイオリンを持つて暑い小室から脱け出して、臺所へ入つて來たところであつた。

「あんな途徹もねい育ちかたをした子供を誰が欲しいつていふものか」と新右衛門は猶も語を繼いで「彼奴の話ちやその親父ツていふのも、何もしねいでバイオリンを弾いて、年中森中を漂浪いてたんだ。食べるものも著るものも何もなくなると、山の中の村へ買ひに時々出て行ツた位なものだ、それだもの、誰が欲しいがツていふものか」。

民雄は臺所の入口で咽び泣きさうになつた。大急ぎで裏口へまはつて、そこから細長い物置きを抜けて納屋の草置場へ行つた……そこは父さんに一番近いやうな氣がするのだ。

民雄は心配で遺瀨なかつた。誰も自分を欲しがらないんだ。自分の耳に確にその言語が入つたのだから、誤りではない。バイオリンを持つて遠い／＼父さんのゐる國へ行くまでに、暮らさなければならな

長い――夜と晝をどうしたものだろう。誰も自分に要はないといふなら、どうしてその長い月日を送つたらいいだらう。自分のバイオリンが偽りのない、純な、豊かな音色で美しい世界の事をどうして奏でられやう……父さんはそうせよと仰つたのだが。と思つただけで民雄は悲しくなつて聲を放つて泣き出した。それから、かれはまた父の言つた他の事を思ひ出した「よく覺えて置いて……御前の望みのものはバイオリンの中にあるんだぞ。弾きさへすればいい。すると、山の家の上に見えてゐた廣い廣い空が御前の頭の上に来てくれる。山の森の中に居る御前の仲よしの友達が集つて来てくれる」と、あそつたど叫んで、彼はバイオリンを取上げて弓を絃に觸れた。

表の縁では御内儀さんが次のやうに言つてゐた「それや孤兒院もあるし、さもないければ養育院……引受つてくれゝばね……でもあら一寸……と急に言ひ止めて

「どこであの子は弾いてゐるんだらう」
新右衛門は耳をそばだてた。

「納屋だらう」

「寢にいつたのに」

「また寢に行くまでのことよ」と新右衛門は怖らしく言ひ放つて、月の照る庭を通つて、納屋へと大跨に歩いていつた。

やつぱり御内儀も跟いて行つた。そしてやつぱり二人で納屋の戸口を入つて、思はず立停つてしまつた、今夜は軽く早いにぎやかなメロデーが階段を傳はつて來ないで、緩い調子の物を思はせるやうな美しい音が、高くなり、強くなつて、しまひに細々と消え入りさうに響いた。戸の傍の夫婦は聴き入つてゐた。

二人の心は昔に歸つてゐた……二人の仲に子供のゐた頃に。その子は嬉々とした笑ひ聲をこの納屋に響き渡らせたり、バイオリンも弾いたのであつた：今のこの子のやうに弾きはしなかつたが、「うちの新助が月夜にたつた一人弾いてゐるとしたらどうだらう」と二人の心に同じ考が浮んだのである。

新助といふ子が家を出るやうになつたのはバイオリンのためではなかつた。畫家になりたいと言ひ出したからなので。新助は小さい時からどこでも所嫌はず客間の壁でも天鷲絨表紙の寫眞帳の飛頁でも、好きな繪を書いたのであつた。十八の時に畫家にな

るつもりだと宣言した。父親は一ケ年の間、頑としてそれを斥けて、木炭も鉛筆も家に入れさせず、食事を睡眠の他には、すこしも暇のないやうにこき使った。どう／＼新助は出奔してしまつた。

それから十五年経つたが新助は顔を見せない。但し新右衛門の机の中に新助からの手紙が返事も出さずに二通あるのをみると、罪は少なくとも息子にあるのではなかつた。

新右衛門夫婦が納屋の戸口に入つたところに立停つて考へてゐるのは、大人になつた新助、強情ばりで家出をした忤の事でなく幼兒の新助なので、可愛い、縮れ髪の子、両親の膝近くで遊んだ子、この納屋でふざけまはり夜になると母の腕に抱かれて眠つてしまつた子の事なのであつた。

御内儀さんが先へ口をきいた……先刻縁で言つた時とは調子が變はつてゐた。

「御前さん」と慄へ聲で呼んで「あの子を寝かしてやりませうよ」

といつて、つか／＼と歩いて階段はしを登つていつた。新右衛門も跟いていつた。御内儀さんは階段を登りきつて、

「さ民雄、ちいさい子供はもう寝るんですよ。御出で！」

といつた聲は低くて慄を帯びて居た。御内儀さんが、遠くあこがれるやうな痛ましい眼付をする時と同じやうに今の聲は民雄の身にしみた。そろり／＼と少年は月の光の射すところへ出て來た。その眼はジツと御内儀さんの顔を見詰めて。

「あの……僕を……置きたいんですか」と途切れ途切れに彼は問ふた。

御内儀さんは嗚咽むせびないた。眼の前には黃白の寝衣を新助のを――著た細そりとした少年が立つてゐた。

そして黒い物思はしげな眼――新助の眼に似た――で自分を見入つてゐた。御内儀さんの腕は抱きかゝへたくてウジ／＼した。

彼女は情がせまつて少年をきつく抱き締めて、

「あいよく、私の子にしてね……いつまでも」と彼女は叫んだ。

民雄は満足に溜息をした。

新右衛門は唇を開いたが、何も言はずに亦それを閉ぢた。彼は妙に當惑したやうな顔をしてドシ／＼階段を降りていつてしまつた。

民雄が牀に入つて餘程して新右衛門は縁端で妻に對つて冷かに、

「御蓮、御前さつき納屋で下らなく感情を起こしてあんな約束をしたが、あれがどんな意味のものだか、解つてるンだらうな。……不氣味なバイオリンの音だの月の光なんかで御前一時氣が變になつたンだ」

「でもあの子が欲しいンだもの、あの子はどうも……あの新助みたやうで」

新右衛門の口元に、きつい筋が出て來たが、その聲はやゝ慄へてゐた。

「新助の事をいつてるンぢやない。二階にゐるあの漂々した、狂氣じみた子供の事をいつてるンだ。

それや仕込めば働くだらうから、まるツきりの損にもなるめい。しかし一人口が殖えるンだ。目下はそれがこたへるからな。あの一件の手形がよ……八月拂ひだせ」

「でも、銀行の預金が一太抵それに足りるだけあるツていふぢやないの」と御内儀さんはひどく詫びるやうに言ふ。

「そうだ、併し大抵足りさうだつていふのはたつぷ

り足りるつていふことはちがふ」。

「まだ時がある——二ヶ月以上もあります。八月三十一日までは支拂はないでいゝンだから」

「それは分つてら。だがあの子供だ。御前どうしやうツていふンだ」

「畠でいゝも、すこし、間に合はないかね」

「合ふかもしれないが、どうだかなど」男は危んでゐる「バイオリンの弓ぢや草取りも出來ねいし、畠も、うなへねいな。あいつにや、バイオリンの弓より他に扱へないやうだ」

「教へてやればいゝ——あんなに上手に弾くンだから」と御内儀さんは呟いた。いま迄にこの女が夫に對つて、つよい言語をまして、自分の仕出かした事の辯解のためなどに、使つた例はないのであつた。

新右衛門はちいさく「フム」といつたぎり返事はしないで、起つて戸内へ入つてしまつた。

翌日は日曜日だつた。この農家で日曜日といふと嚴かな窮屈な靜肅なものであつた。新右衛門は血管には昔の清教徒の血が流れてゐて、爲すべき事とかすまじき事とかいふ事については彼はひどく八ヶ釜

しかつたのである。それ故彼は日曜の朝我家から思ひもかけず美しいバイオリンの音が響き出してそれに眼を覺させられて此上もなく驚いた。立腹しながら大急ぎで彼が衣服を著換へてゐる間も、強く、面白く陽氣に、樂の音はあたりに張り渡つてゐた。新右衛門は血相を變へて廊下を駆け抜けて民雄の室を押し開けた。

「こゝら貴様どうしたんだ」と彼は問ふた。

民雄は嬉々と笑つて、

「あら解らないんですか。音で解るかと思つたのに。僕嬉しくてくしやうがないの。鳥がね、樹の中で

「居て御くれ—居て御くれ」ツて唱つて僕を起こすのです。御日様も山の上へ出て「居て御くれ—居て御くれ」ツていふんです。ちいさな樹枝が僕の御窓を叩いて「居て御くれ—居て御くれ」ツていふんです。ですから僕バイオリンを取り上げてその通りをあなたに話さずにはゐられなかつたのです」。

「でも日曜だぞ——神様の日だ」と新右衛門はきびしく辯じた。

民雄は不思議さうな眼をして、たゞ立つてゐた。

「貴様は神様の事も知らねいのか。誰も神様の事を貴様に教へなかつたのか」と男は烈しい調子で吟味を始めた。

「あゝ、神様——え知つてます」と民雄はあり／＼と安心の態をして「神様は薔を褐色の毛布でくるんで樹の根を……」

「俺は褐色の毛布だの樹の根なんぞの事をいつてるンぢやねい。今日は神様の日だから、そのつもりで聖く暮らさなければいけないんだ」

「聖くですの」

「そうだ。バイオリンを弾いたり、笑つたり、歌つたりしてはならねいぞ」。

「だツて、笑つたり唱つたりするのは善い事で、美しい事なんです」と民雄は眼を大きくして惑ひつつ辯解した。

「時によつてだ」と新右衛門は、しぶ／＼讓歩して「併し神様の日にはいけない」。

「神様が御嫌ひなさる……ツていふ事です」

「そうだ」

「あ、そうなの」と民雄は晴やかな顔をして、「そんなら心配はいりませんよ。あなたの神様は異ふン

です。ね。僕のは、一年中何日でも美しいものを御好きなのです」

新右衛門は、暫く黙然としてゐた。彼は生れて始めて答に困つたのである。しまひに彼は、

「もう此話はよさう。では、かうしやう——俺は日曜に貴様がバイオリンを弾くのが厭なんだ。明日まで延ばして御置き」

と言捨て、廊下を歩き去つた。

朝食は此日は特に沈静だつた。一體この家では、食事は賑かなものではなかつたが、此時の位、陰氣なのは始めてだつた。食事がすむとすぐ三十分聖書の朗讀と祈禱とがあるのだつた。新右衛門が、聖書を讀んできかせる間、御内儀さんと平藏とは堅くなつて眞面目に椅子に掛けてゐた。民雄も、眞面目に堅くなつて坐に著いて居やうと思ふのだつたけれども、薔薇の花が頭を振つては、御出で——をしてゐるし、樹の中の小鳥が、いらつしやい——ッて誘ひ顔に囀つてゐるのであるから、どうして窮屈にかしこまつて居られやう。殊に先刻の強きかけの歌を弾いて、「居て御くれ」といはれるのがどれ程悦ばしい事だか誰にも彼にも知らせてやりたくて指が自然に

動いて仕方がないのであつた。

併し民雄は靜にしてゐた。自分に出来るだけ努めて落付いてゐた。たゞ足がトン／＼拍子を打つと、思ひ入つた眼が彼方此方へさまよふので、彼の心は新右衛門の讀んでゐる「イスラエル」の子等が荒野に漂浪してゐる話から掛け離れてゐるのが分つた。

祈禱が済むと、家内中教會へ行く支度をするので、一時間ばかり、音を立てずにゴタ／＼してゐる。民雄は教會へ行つた事がなかつた。それで、平藏にどんな風のものかと訊ねた。平藏は、唯肩をすばめて誰にもなく、

「どうだ、今のをきいたか」と言つたが、これで民雄に對しての答には一向ならなかつた。

教會へ行くには、きれいに磨き立て、行くのだといふ事が民雄に解つた。彼はこれ程に擦られたり櫛でかゝれたり、ブラシをかけられた事はなかつた。そして民雄にツて白い服と赤いチクタイを御内儀が出してくれた。それを出して、彼女は寢衣の時と同じに、少し泣いた。

教會は村にあつて、ごく近かつた。中へ入つて民雄は大きく眼を開いて興味を覺えながら、中央の通

路を新右衛門夫婦のあとに跟いていつた。時間が早かつたので禮拜式は始まつてゐなかつた。オルガンを弾く人さへも著席してゐなかつた。天井までも達する藍と金の大きなパイプの下に弾く人の席があるのであつた。

このオルガンといふのが村の誇りで、この土地出生の偉い人が寄附したのであつた。そればかりでなく寄附者は、年々相當の金を出して日曜毎に教會から名ある音楽家を聘して弾いてもらふやうに取計つたのである。今日オルガンを弾く人が席に著いてみると新右衛門一家の席に見馴れない子供がゐたのでその子が不思議がつてゐる眼と見合せて微笑してみせた。それからあとはその人はもう音楽の方に氣を取られてしまつてゐた。

新右衛門一家の席にゐて民雄は息を凝らした。彼の耳にはバイオリンが十も二十も合奏されてゐるやうは思はれた。いや名も知らない他の樂器が十も二十も頭の上で鳴り渡つてゐるやうなので彼は有頂天になつて思はず立ち上つた。押し止めやうとするうちに、彼は通路に出てしまつた、……眼は美妙の音の源と思はれる藍と金のパイプを視入つて。それか

ら彼は弾いてゐる人と幾段かの鍵盤とを眺めた。そして足音をぬすんで彼は通路を進んで、階段からオルガンのある所へ登つて行つた。

長い――間彼は聴き入つてちつと立つてゐた。やがてオルガンの音が止むで、牧師は祈禱をしやうと立つた。でもきこえて來た聲は、大人のではなく子供の聲で

「あの、どうか、僕にそれを教へてくれませんか」といふのであつた。

オルガンの人は咳をしだした。高音部の唱ひ手が民雄を傍へ引き寄せて何か彼に囁いた。牧師はしばらく度を失つて黙つてゐたが、祈禱にとりかゝつた。新右衛門の席では、怒りきつた男と面目ながつてゐる女とが、民雄をもつと仕込まぬうちは教會へ連れて來まいと心に誓つた。(七終)

○幼稚園笑話

一、食事になった南の藤棚を洩れて秋の日ざしが穩かに流れ入つて室は愈々明るい。先生も子供ものんびりした心持で楽しく箸を運んでゐる。と真中の机の隅から頼きやうな聲が起つた。「前かけべんとう〜」見ると紘さんが立上つて一耶さんのエプロンの御飯粒を指さしてゐる。皆一時に笑つた。續いてあちこちから起る「机べんとう」「椅子べんとう」

二、同じく食事、西洋人形みたいな綾子さんは組での愛嬌者ないしさうなパンをいくつもお皿にのせてにこ〜してゐたがやがてその一つを一寸かちると同時にパンを持つた右手高くあげて「パンのはげあたま〜」

三、雨が降つて外へ出られない。交る〜恨めしさうにガラス越しに可愛い、顔をのぞかせては空を見てゐる。やがて元氣者の四五人が電車遊をはじめた廊下へ椅子を並べて花子さんや雪子さんやお客様をうんとおせて車掌もきまり切符も出来て汽笛も汽車の音も口で間に合つた。その中に積木の小さいのなか〜に入れて「サンドイツチ、キヤラメルハ如何ですか」とかつぎ始める。私も〜と忽ち賣れた「キヤラメルはなしいわね」と云ふ聲にふりむくと四角い小さい積木の一つがもう雪子さんと千代子さんの口に入つてゐた。

本誌定價

一冊(郵税共)金貳拾五錢 六冊 前金壹圓五拾錢
十二冊 前金 參 圓 (郵券代用賣割増)

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正九年十一月十二日印刷
大正九年十一月十五日發行

編輯兼發行者 黑 瀬 豐
東京市下谷區花園町一番地

印刷者 柴 山 則 常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷所 杏 林 舍
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會

日本幼稚園協會役員

會長

湯原 元一

主幹

倉橋 惣三

幹事 (イロハ順)

井村 くに

池田 トヨ (會計) 坂内 ミツ (庶務) 星野 樂和 田實

和田 くら

梶原 梢 土川 五郎 奈良山 梅 向井 琴柱

黒瀬 つや (編輯)

小向 きみ 小山 はな 及川 ふみ

評議員 (イロハ順)

乙竹 岩造

吉田 熊次 田中 ふさ 野口 幽香 安井 哲

横山 榮次

藤井 利譽 下田 次郎 日田 權一

地方委員 (イロハ順)

折井 彌留枝

大和田 りょう 坪内 きく 宇式 かん 久住 モト

坂井 ふで

司馬 のぶ 望月 くに 膳 たけ

加盟保育會

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 東京市保育會 | 京都保育會 | 大阪市保育會 | 神戸市保育會 | 静岡縣保育會 |
| 名古屋保育會 | 香川縣保育會 | 福島縣保育會 | 吉備保育會 | |

